

## 〔東京桑野会〕

### 安積高校創立140周年に寄せて

#### ― 開拓者精神の源流 ―

東京桑野会会長

浅川 章

(七十六期)



我が母校・安積高校は1884(明治17)年、福島県立福島中学校として創立され、昨年140周年を迎えた。

爾来、三万六千有余の人材を輩出し、県内外をはじめ国際的にも活躍するなど輝かしい歴史と伝統を築いてきた。校舎は福島県中央の安積郡の一寒村だった桑野地区に建設された。歴史を緋けば、桑野の地は江戸末期には奥羽街道の一宿場町に過ぎず、明治初期には人口わずか七百人、一帯は数千町歩に及ぶ茫漠たる大地が広がり、水の便も乏しく安積原野とも呼ばれ、太古の姿そのままに明治の世を迎えた。

明治六年、旧二本松藩の士族百十八戸が現在の母校近くの大槻原に移住したのが嚆矢で、移住といっても家屋などなく、近隣の寺院などに分宿し開墾に従事した。明治十年代には新政府の旧士族授産事業が本格化し、維新により家禄

を失った二本松、会津、棚倉藩や久留米、鳥取

土佐、愛媛、岡山藩など旧士族が続々と入植した。彼らは或いは戊辰戦争の敗者として或いは家禄を失った没落士族として、この地を再生の出発点に、延いては新日本の礎石とならんと覚悟して原野の開拓にあたった。しかし、衣食住の労働環境は困窮をきわめ、旧藩士の日記などによれば、過酷な労働と栄養不足から病人が続出し或いは死亡し或いは脱落し或いは海外へ渡ったとある。このような試練に遭遇しつつも彼らは北西に聳える雄峰安達太良山を眺めて士気を鼓舞され、荊棘茂るる広大な荒地地への一鍬、一鋤に開拓の希望を託した。このような苦難の開拓の歴史とその後の桑野村民の困苦の有り様を冷徹に活写した著作が女流作家の中条百合子(後の宮本百合子)の文壇デビュー作「貧しき人々の群れ」である。因みに百合子の祖父・中条政恒は官吏として安積開拓の最大の功労者とされている。

1960(昭和35)年春、僕は安積高校に七六期生として入学した。その年は奇しくも国内は「安保闘争」(日米安全保障条約改定反対闘争)の最中であって騒然とした状況にあったが、入学の喜びに浸っていた僕らは知る由もなかった。校舎の周辺や丘陵には当時を偲ぶよすがとして桑畑が点在していたが、資料室にて母校の沿革や安積開拓の歴史を知り、開拓者精神の由来を学んだ。そして折に触れ、七十余年前の母

校創立時に思いを馳せた。

往時の安積中生は、戊辰戦争の傷跡から懸念に立ち直らんと苦闘する県民や没落士族らによって建設された安積疎水に象徴される開拓の現実を眼前にして開拓者精神を涵養し身に付けていったに違いない。

今日、母校校門内に入り健児の像を見る時、往時の全国から入植した旧士族の人々と共に開墾に当たった桑野村民の新天地創造への不屈の精神が判然と思ひ起こされ、見上げれば苦難の中でも灯し続けた先人の希望の松明を継承し、具現し、発展させよとバルコニー上空から大音が響く。

これに敷衍して言えば、現在における開拓者とは何か。今日、開発の波は五大陸の隅々にまで及んでフロンティアはほぼ消滅したとされる。翻って、現代社会には未開拓の不気味な荒野が出現した。地球を覆う気候危機、打ち続く戦争、感染症などである。2023年は年間を通して地球の平均気温が観測史上最高を記録し、国連事務総長は「地球崩壊が始まった」と言明した。

こうした巨大な荒野に対して、その病根にメスを入れ、人文・自然科学の鋤や鍬を持って敢然と立ち向かう開拓者の出現が待たれている。

安積健児・賢女の中から開拓者精神に溢れて勇躍・隊列を組んで陸続と広大な荒野に入っていく群像を想像することは愉快である。